

19	安 城	明祥中学校	オニツカ リュウジ 名 前 鬼 塚 竜 次
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究題目

自分の論理的思考を形にし、周囲の力を借りながら客観的な視点から深めることのできる主体的な生徒の育成

研究要項

1 主題設定について

（１）令和の日本型教育の方向性

令和の日本型教育を進めていくにあたり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が推し進められている。これはA Iやロボットなど、人間を支えるべく生まれた技術の台頭により、日本を支えていく人材の是非を問われる状況が予測されることに端を発している。多種多様な価値観や文化をもつ社会に対応するというだけでなく、人間としてのアイデンティティを確保しながら万人に基礎的・基本的学力を身に付けていき、生きる力を育むことが中心に据えられている。学習指導要領もそれに沿った内容で形成されている。

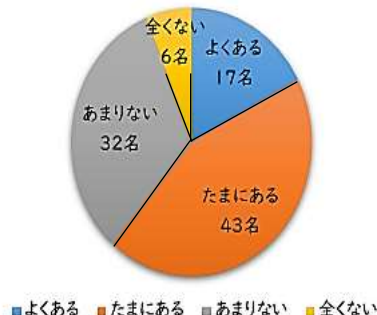
学習というのは、長い人生の中で学校にのみ存在するわけではない。義務教育である小学校、中学校、その先の高等学校、大学、そして社会人として職場に勤めていても何かしらの学びが発生する。先述したとおり、そこに多種多様な価値観や文化に加え、A Iなどの知的作業を行える技術やシステムが介在することとなる。そうなれば、学校教育段階で従来の一斉指導のみならず、自由進度学習のような柔軟性をもつ学習に取り組んでおく経験は、未来を生きる児童生徒の一助となるのは想像に難くない。

自由進度学習を取り入れていくことは、そうした教育を進めていく中で、学習指導要領に沿いつつも、個別最適な学びを展開していくことにつながっていくと考えられる。本研究においては、「自ら考えをもち、まとめていくこと」、「他者と関わり合う中で、個人の取り組みを調整すること」の2点を重視して進めることが、主体的な生徒の育成につながると考えた。本実践においても、周囲と調整をしながら解釈をまとめていくこと、より思考と表現を深められるよう自由進度学習の学習形態を設定した。

（２）生徒の実態

物語文の学習を行っていくにあたり、生徒に対して「解釈を行うこと」についてアンケートを行った。回答者は、第2学年98名の生徒である。質問の中の一つである、「あなたは小説、映画、演劇、ドラマ、漫画、アニメ等の作品で自分の解釈を考えることがありますか。」について、【資料1】のような結果になった。普段の生活において小説などの文学的文章及び、映画や

あなたは小説、映画、演劇、ドラマ、漫画、アニメ等の作品で
自分の解釈を考えることがありますか。



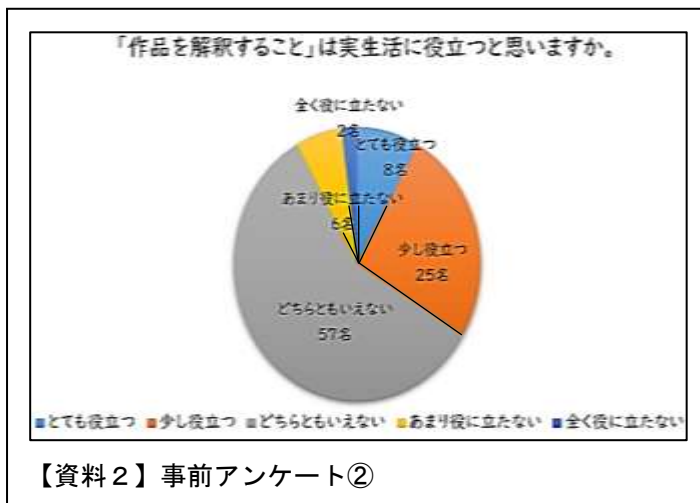
【資料1】事前アンケート①

漫画などの各種メディアにおいて、「よくある」と答えた生徒の割合が2割未満と少なく、65名と半数以上の生徒が「たまにある」「あまりない」と回答している結果から、解釈によって自分の考えを深めることへの関心が薄いことが分かる。それに関連して、他の質問における『作品を解釈すること』は実生活に役立つと思いますか。」というものについては、【資料2】のような結果が表れた。

この結果を踏まえると、【資料1】と同様に「とても役立つ」「少し役立つ」と回答している生徒が3割程度であり、「どちらともいえない」

が半数以上を占めている結果から、解釈をすることの意義や効果について実感を得られている生徒が少ないことが分かる。また、「とても役立つ」「役立つ」と回答をした生徒の回答には、その理由として「人の気持ちを考えて行動することに役立つ。」「人間関係が豊かになる。」「想像力も豊かになる。」というものもあった。生徒が物語文の解釈をまとめる学習を通して、一つの物事に対する様々な視点をもつことや、他者の視点を取り入れることを学び、方法を駆使して課題解決に取り組む姿勢を身につけさせたい。

以上のことから、私は国語科の学習の中で、自分の論理的思考を形にし、周囲の力を借りながら客観的な視点から深めることのできる主体的な生徒の育成を目指して、本研究・本実践を構想した。



2 研究の仮説と手立て

本研究にあたり、次の仮説と、仮説に迫るための手立てを設定した。

【仮説1】

物語文の学習において、生徒が自ら考えをまとめる自由度の高い単元構想であれば、積極的に取り組み、論理的思考を深めようとすることができるだろう。

【仮説2】

自由に情報を共有できる学習環境を設定することで、生徒が客観的に自分の考えや表現の質を高めるための自己調整力を身につけることができるだろう。

仮説に迫るための手立て

- ①生徒が主体的に物語文を解釈する活動を、単元学習の中心として設定する。
- ②自由進度学習を取り入れ、自分の能力や状況に合わせた質と量を伴う成果を上げられるようにする。
- ③まとめた解釈の発表形式を選択制とし、生徒が自分に適したやり方で情報を整理できるようにする。
- ④Padletを用いて、級友の解釈や疑問点、学習の方針を共有できるようにする。
- ⑤学習の座席を発表形式ごとに座り、同じ方針の生徒同士で協力できるようにする。

研究仮説（自由度の高い単元構成と情報共有環境が、論理的思考と自己調整力を高めること）を検証するため、手立て①～⑤によって、従来の一斉授業よりも自由度を高めた単元構想と学習環境を設定し、生徒が主体的に学習に取り組む土台作りを進めた。また、後述する物語の解釈をまとめるにあたって生徒同士が意見交換を容易にすることで客観性を確保できるように努めた。

3 実践の概要

(1) 単元構想



【資料3】本実践の単元構想図

『ヒューマノイド』単元予定表			
時間数	学習予定内容		
①	自由進度学習の説明	本文の通読	設定の確認
②	資料の紹介	情報共有	
③	情報共有	解釈の整理	質疑応答①
④	補足	質疑応答②	
⑤	発表に向けて	解釈のまとめ	質疑応答③
⑥	発表(1人2分間:名簿番号1~20)		
⑦	発表(1人2分間:名簿番号21~40)		

【資料4】生徒に提示した単元予定表

【資料3】の単元構想を基に学習を展開し、実際に生徒に対しては【資料4】の形で提示している。単元の最初の授業で、教師による範読を聞いた後、初発の感想とともに現時点での自分の解釈を記入する。そして、第2時以降に場面設定と時系列を確認した後、自由進度学習を開始して、生徒たちは本文中の記述や場面設定を参考にしつつ、自らの解釈の根拠となる部分や、浮かんだ疑問に対する答えを探していく。自由進度として使える時間数は限られているので、期限を見据えて調整していくことを生徒に促す。自由進度学習の中で解釈をまとめた後は、級友に向けて発表をして聞き合う活動を設定する。解釈を聞き合うことにより、それぞれの視点の違いや、同じ解釈でも土台とした根拠の違いから、思考過程の差異を実感し、自らの今後の学習に還元していくことができるように振り返りを進めていく。

(2) 使用する教材

『ヒューマノイド』著：伊坂幸太郎 光村図書 中学校国語2年4章「人間のきずな」より

本教材『ヒューマノイド』は、かつて主人公と友人であるタクジとの間にあった軋轢と、再会したときにおける互いの変化について描いた物語である。登場人物の心情描写は細くなされているものの、伏線としての描写や抽象的な描写が多く、その分解釈の余地が生まれるものとなっている。本教材では、自由進度学習の中で、自ら問いを立てたり仲間と解釈やその根拠について話し合ったりしながら、物語の主題に迫っていきたいと考える。さらに、解釈を形にしていける活動を通して、自分の意見に自信をもって誰かに伝えたり聞き合ったりする力を育てられるようにする。

(3) 抽出生徒の状況

	生徒の様子	目指す生徒像
生徒A	初読で伏線に気付くなど鋭い洞察を見せる一方、他者への伝達に課題がある。	他者と関わり、多様な視点を自らの表現に還元することを目指すことができる生徒。
生徒B	国語の授業に意欲的であるが、単発的な発言が多く論理的に思考を深めることが苦手である。	単発的な発言を、時系列や因果関係に基づいた論理的な解釈へと深めることを目指すことができる生徒。

4 実践の結果

本実践の自由進度学習にあたり教師からは、第1時における範読、時系列と場面を整理した資料、作者のメッセージを提示した。自分の解釈をまとめるという学習内容から、生徒に向けて「この物語に対して思うこと、疑問に感じることを解釈としてまとめていきましょう」と問いかけた。また、その根拠を教科書本文から必ず求めるようにすることを伝えて、生徒は読み取りを開始した。第1時において、生徒Aと生徒Bは【資料5】、【資料6】のように振り返りをまとめた。

【資料5】 生徒Aの初発の感想と疑問に思ったこと

この話は「恥ずかしさ」を題材にしているのではないかと思った。人間の本質についてタクジはしっかり考えられていてすごいなと思った。ところどころ絵の具の広告や、ロボットが転ぶことなど、タクジが登場する暗示？伏線みたいなのが張ってあると思った。次は、最後の「聞いてた話と違うじゃないか」って言っていた主人公の心情が少し分からなかったので考えたい。

【資料6】 生徒Bの初発の感想と疑問に思ったこと

「僕」が「怒りにも似た、いらだちが湧いた」のはクラス中に迷惑をかけたのに関係のない話をしていたからだを読み取りました。タクジは過去に「僕がヒューマノイドロボットを作るなら、恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と言っていたのに、なんで現在では「こちらに手をふるヒューマノイドロボットは、この恥ずかしさを分かっているようには、見えなかった。」と書いてあるか分からなかったので考えたいです。

生徒Aは、初読の段階で細かな描写や伏線が存在に感じている様子が見られる。しかしながら登場人物の心情についてはつかみ切れていないということもあり、第2時以降では、積極的に他の生徒から意見を求めている様子があった。

生徒Bは、本文の描写と時系列の因果関係をつかみ切れていない様子が見られる。自分の疑問点は把握できているので、仲のよい級友とグループを組み、教科書本文の描写を一つ一つ読み取ろうとする様子があった。従来のような、教師の発問を主体に読み進めていくわけではないので、生徒が気になった描写や疑問点について、丁寧かつ教科書の隅々まで読み取ろうとする姿勢が多くの子に見られた。

本実践は、「自分の解釈をまとめること」が主軸である以上、同じ解釈でも、その根拠や結論に至った過程が全く同じになる可能性は低い。抽象性が高い本教材は読み手自身の解釈の余地が生まれやすいものとなっている。よって、自分の読み取れる範疇で解釈をまとめ、自分が表すことのできる内容としてまとめていくことが今回の学習の流れとなる。実際に生徒Aは「タクジの考えがなんで、どのように変化したのかを考えたい。」と述べており、本人もスライドをまとめていく中で、自分の着眼点を押し出す形で表現を深めていった。生徒Bは、本文の描写において、伏線が生み出す行間を読み取ろうとする姿があり、それを視覚的に理解できるようにスライドを作成する姿があった。

生徒自身がまとめた解釈を発表する段階までが本実践の内容である。言葉を精選し、それを伝えるように表していくのが国語科の本分であるが、生徒の心理的負担を減らすことができるよう発表形式はデジタル方式、又はアナログ方式による選択制とした。GIGA スクール構想における1人1台端末という環境がある以上、それを活用できる授業構想を組むことは、現在の教育現場では有効な要素であると考ええる。実際に本実践の発表では、結果として9割方の生徒がデジタル方式による発表を行った。また、使用されることの多いスライド作成ソフトである Microsoft PowerPoint（マイクロソフト パワーポイント）だけでなく、デザインツールである Canva（キャンヴァ）を使用してスライドを作成する生徒も一定数見られた。Canva を用いる生徒の中には、「テンプレートや素材が多くて使いやすい」という声が多く、本文の描写を視覚的にまとめることへ役立てていた。

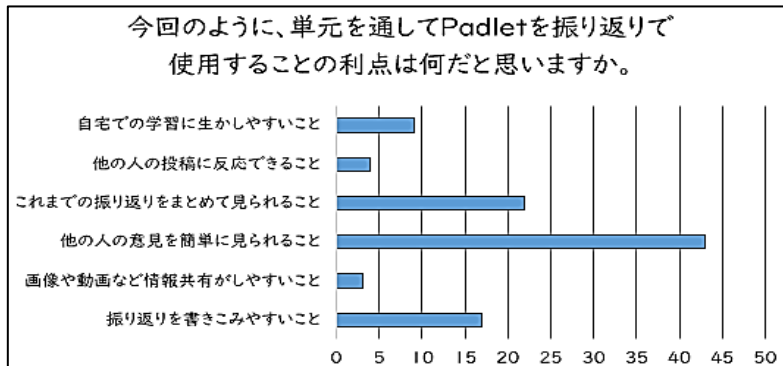
仮説に迫る手立て④で述べたとおり、本実践では Padlet を用いて情報共有と振り返りの記入を行った。いつでも級友の現時点での解釈と疑問点、振り返りを過去のものも含め閲覧できる状態にあるため、生徒が読み取りを進める中で参考にしたリ、直接書き込みをした生徒に質問したりする姿が見られた。これは、個人で行う生徒、グループで行う生徒、どちらも活用できる状態にあるため、本実践の自由進度学習では、より効果を発揮するものとなった。生徒Aや生徒Bのように中～高位の学力の生徒だけでなく、低位の生徒にとっても、困ったときに誰に聞きに行けばよいか視覚的に分かる形となった【資料7】。

また、授業実践後に行った事後アンケート（2年生98名に実施）の中の質問の1つ、「今回のように、単元を通して Padlet を振り返りで使用することの利点は何だと思いますか。」という質問に対し、【資料8】のような結果となった。「他の人の意見を簡単に見られること」が半数以上の割合が回答していることから、他者の意見を共有できること、その透明性が学習の助けになると考えていることが分かる。今後も、1人1台端末が担保される教育現場においては、情報共有や視覚化のしやすさという点では Padlet は有効であると考ええる。

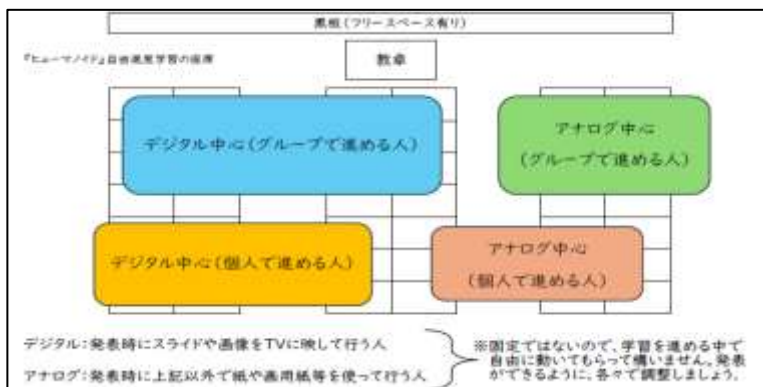
仮説に迫る手立て③で述べた、アナログ方式とデジタル方式の選択に加え、学習を個人で行いたい人、グループで行いたい人という種類分けで行い、教室を【資料9】に沿って配置を決め、自由進度学習を進める形とした。



【資料7】 実際の Padlet 画面



【資料8】 単元終了後の事後アンケート



【資料9】 第1時にて提示した自由進度学習における座席表

生徒A、生徒Bともにデジタル中心且つグループで進める方針で取り組んでいった。生徒Aについては、自分が所属するグループだけでなく、近くにいるグループの生徒や、生徒Aを頼って声をかけてくれる人とやり取りしながら学習を進めていた。振り返りの中でも、「1人では思いつかなかったことも、みんなまで話し合ったら色々な視点が出てきてすごく助けになりました。」と述べており、多数の意見をもらえることの効果を実感していた。しかし、頼ってくる生徒の中には低学力で、生徒A自身が丁寧に教え込む結果、時間をかなり取られてしまう様子もあった。自由進度学習で進めることの裏返しには、生徒の学び合いによる負担のバランスの歪さが出てしまうことは課題であると感じた。生徒Bについては、基本的に同じメンバー、同じグループで学習を続けていた。解釈をある程度まとめた段階で、近くのグループが練習で解釈を見せ合っているところを眺める様子もあったが、あまり積極的に他のグループや級友と関わろうとする姿は見られなかった。しかし、単元の振り返りの中では、「色々なスライドを見て人それぞれいろんな解釈があったり、解釈が同じでもいろんな根拠があったりして、たくさんの考えに触れることができました。」と述べているので、多様な情報から客観的な判断をしていくこと自体には、かなりの意識をもてるようになったことが分かる。

5 成果と今後の課題

本教材では、自分たちで物語の解釈を考え、説得力が生まれるよう根拠を教材本文から探し、発表の形式と発表する論理と資料の精選を進めていった。手立て①、②、③によって、生徒は物語文を読み取っていくうえで、教師から提示された問いだけではなく、自分が疑問に思った点について教科書を中心に「どうしたら自分の解釈としてまとめていけるだろうか」という主体的な意思の下で学習を進めていった。また、自由進度学習のための学習環境を設定する手立て④、⑤から、学習の進み具合によって自己調整をする姿が見られた。各手立ては仮説に対して有効だったと考えられる。

しかし、国語科における自由進度学習は、内容の正確性と、自他との中での学習の関係性について課題が見られた。本授業実践の中でも、『ヒューマノイド』の物語の解釈の範疇を超えて、「タクジはロボット開発者ではなく哲学者になることが向いている」といった、教科に限らず一般的な視点に逸脱してまとめる生徒も見られた。国語科で自由進度学習を設定した場合、学習指導要領に示されている学習内容の担保をすることの難しさが明らかになった。国語科としての学びであるのか、総合的な学習の時間としての学びであるのか。単元構想や授業展開を組んでいくうえで、生徒の学習の仕方や、その評価の仕方を具体的に明示していく必要があると考えられる。

次に、自他との中での学習の関係性という点は、普段の人間関係が強く影響してしまうことによる課題がある。本実践において、生徒が解釈をまとめていく中で、個人にせよ、グループでの活動にせよ、日頃の学校生活の中で近い生徒、仲のよい生徒同士でのやり取りが中心となった。特に、低位の学力の生徒はその傾向が強く、解釈の成果物もグループ内で共に作った生徒のものと似通う部分も見られた。ただし、今回は生徒本人が解釈を設定すること、教科書本文から根拠を引用するということを設定しているので、あくまで学習の上では忌避することではない。課題となる点は、その成果物を遂行する際に、多様な視点からの検討が限定されたという点である。普段の人間関係で固定される以上、どうしても意見を得られる幅は限定される。個人で学習を進めている生徒はなおのことである。これについては、自由進度学習を重ねていくこと、どの人を頼るとより効率的かつ効果的に自分の学習を進められるのか判断することが可能になれば、自然に解消していくことが期待される。そのためには、教科においての学習指導はもちろんのこと、学級経営も上手く活用して生徒を育てていく必要がある。

以上の2点が、自由進度学習を基軸とした国語科授業を実践するにあたり課題となった。これらを解消していけば、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を図ることができると考えられる。